日本一王座決定戦10年史

ライダーとショップが死力を尽くして"日本一"のタイトルを争う。それが日本一王座決定戦だ。昨年で第10回を数え、ひとつの区切りを迎えた。ED界そのものが変貌しようとしている今、新たな歴史を刻む前に、これまでの10年を振り返る。

構成／オフィスペロポー

▶ゲスト参加ライダーも激走。昨年はUSA若手のトップライダー、スティーブ・ハッチ選手

▲2ストクラスで94年2位、95年3位。96年、ついに「日本一」の栄冠を獲得した田中昇選手

▶94年に戸田亘選手の総合3連覇を阻止した渡辺親弘選手。95年の個人戦SPECIALでも優勝を果たす

▼王座決定戦創成期に活躍した石井正美選手。94年に復帰し96・97年連続2位。あと一歩が…

▶初参加の昨年、見事に優勝を果たした伊田井佐夫選手。副賞キッズクロスに大喜び

創成期～第6回大会

第4回大会から現在のEDレース形式へ変貌

「最速エンデューロ王者決定戦」の名のもと、タイムアタック形式で行われていたのが87年。バレ那須オフロードパークを舞台に、3・5kmの周回コースを4周走り、そのうちの3周の平均タイムで勝者を決定。そんな100分の1秒を競い合ったのは、国際A級の石井正美選手、星野春男選手、国際B級のウイリー松浦選手をはじめとする一流ライダーだった。

一大転機となったのは、91年の第4回大会。初めてバックオフ主催となり、2時間耐久レース形式を採用。当時最新の91DT200WRや91CRM250R、91KDX250SRなど、最強マシンが相次いでエントリーした。レースはガレ場の下りやフルパワーの上りでバンクが続出。マシンやライダーの速さ以上に、ピット作業も含めた総合力勝負となった。

ラスト10分、トップ走行中の国際B級・北原輝紀選手（SHOPウイリー松浦CRM250R）がピットイン。ガス補給を終えてコースに復帰したまさにその時、2位走行中の国際A級・安部雅明選手（モトスペースDT200R）が鼻先をかすめてトップに浮上する。しかし、安部選手が下りでアクセルを開けすぎて転倒したとき、勝負はついた。一大バトルを制した北原選手が、総合優勝をゲットすることになる。

悔しさをかみしめた安部選手は、翌92年に雪辱をかける。2人交代OKの4時間耐久となったこの第5回大会では、レース前に、スタート順を決めるタイムトライアルが行われた。ここでトップのタイムをマークしたのが、安部選手と国際B級の中島選手が組んだKDX250SR。改造パーツのほとんどにKXのものを流用し、とてつもないハイパワーマシンに仕上げてきたのだった。

ル・マン方式でスタート。トップで帰ってきたのは、やはりこのKDX。しかし一時間30分を経過したとき、トップ集団の2スト勢に不気味に迫るマシンが出現。そのマシンこそ、ガレージハイブリットのXLR250R、戸田亘選手だった。4時間でピットインは2回だけ。しかもライダーは一人。着実に周回を重ね、まさに疲れずのライディングで総合優勝を果たしてしまう。

初の4スト総合Vとなったエンジンを優先させ、エンジンをショートストローク化。絶対パワーでは2ストに劣るが、ピックアップがよく、高回転まで一気に回る。戸田選手の体力とコンスタントなライディング、そしてその走りを120%引き出したマシンセッティングがこの快挙を成し遂げたのだ。

2ストでは、渋谷モーター商会のCRM250Rを渋谷浩・浩司兄弟が駆ってクラス優勝。安部選手は2スト2位・総合3位に終わる。また、注目すべきは2スト3位・総合3位に入った、もう一台の渋谷モーター商会CRM。のちにブルーオイルカップ・キングとなるチーム最年少24歳の渋谷清幸選手が、ベテラン高橋宏行選手と組んで頭角を現した大会でもあった。

93年の第6回大会はペアエントリーができなくなり、ソロによる4時間のエンデュランス。マシンにとってもライダーにとっても、耐久性と確実性が求められるシビアな展開が予想された。となると、優勝候補の最右翼はガレージハイブリットのXLR250Rと戸田亘選手。しかし、スタートでエンジンがかからず、半周以上のハンデを背負うことになる。

序盤トップに立ったのは、国際A級の熊谷光博を擁したKUMAMIZUのCRM250R。一時2位に落ちたが2周で逆転、3時間経過時点までトップをキープした。一方の戸田&XLRは5周でスタートの遅れを挽回、終始一定のペースを守り続け、終わってみれば一位フィニッシュ、総合V2を達成した。同2位は熊谷&CRM、同3位は比留間智久&CRM。特筆すべきは非力なセローで総合4位に入った安喰好二&ガレージハイブリット。期待された谷川龍太郎・ウイリー松浦両選手はリタイアに終わった。

▼87年9月発売のBO創刊2号で掲載された第2回大会

王座決定戦ヒストリー

'87（第1～3回）
1～3回のうち、第2回のみBO創刊2号に掲載。2ストクラスはKDX200でウイリー松浦選手が、4ストクラスはXR250Rで石井正美選手が賞金10万円をゲット。

'91（第4回）
正式にBO主催となり、「日本一王座決定戦」の名前が付く。タイムアタック形式から一斉スタートのレース形式へ移行され、23台が激突。北原選手が駆るW松浦CRMが優勝。

'92（第5回）
戸田亘&ガレージハイブリットXLR黄金期の幕開け。4ストで2ストを蹴散らし、総合優勝を獲得する。参加台数は23台、賞金総額30万円、コースはバレ那須の逆回りだ。

'93（第6回）
参加台数は33台となり、前夜までの雨でコースはマディ、熾烈な闘いが展開された。その中で、戸田&ガレージハイブリットXLRが4ストで総合2連覇の快挙を成し遂げる。

'94（第7回）
バレ那須から池の平へコースを移し、西日本からの強豪も増えて参加台数は34台。降りしきる雨の中、総合優勝はOJAS'ファクトリーRMXを駆って渡辺親弘選手が獲得。

'95（第8回）
ゲストにR・ホーキンスを迎え池の平で開催。例年のショップ対抗では福本敏夫選手&ウエストポイントが優勝。また試験的に行われた個人戦を前年優勝の渡辺選手が制した。

'96（第9回）
2年連続のゲスト参加R・ホーキンスに代わったのはS・ハッチと成田匠。コースとレギュレーションに変更はなし。参加は2スト64台、4スト28台。熟年パワーが炸裂した。

'97（第10回）
コースは山梨県の富士ケ嶺。これまで市販車ベースに限られていたマシンが、EDレーサー（外車・逆輸入車含む）OKのフルオープンへ。参加台数は2スト49台、4スト27台。

通算ランキング

■ライダー2stクラス通算ランキング

順位	ライダー	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	TOTAL
1位	安部雅明	17	17	7	6	15			62
2位	田中　昇			9	17	15	20		61
3位	渡辺親弘				20	20			40
4位	中島昭彦				3	28		5	36
5位	栗林照高				8	13	15		36
6位	石井正美						17	17	34
7位	熊谷光博		13	20					33
8位	渋谷清幸		15					15	30
9位	鈴木昭弘					9	11	9	29
10位	石橋　章		11	15					26
11位	吉友寿夫					9	13		22
12位	伊田井佐夫							20	20
12位	福本敏夫					20			20
12位	曽我幸嗣					20			20
12位	北原輝紀	20							20

■ライダー4stクラス通算ランキング

順位	ライダー	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	TOTAL
1位	戸田　亘		20	20	20				60
2位	池田忠夫	11	17	11	13				52
3位	片山　昇					15	20	13	48
4位	大坊雅春	13	13	8					34
5位	大塚弘幸					11	17		28
6位	田中　一			10	15				25
7位	安喰好二			17		7			24
8位	内田由和				6	17			23
9位	酒井　功					14	9		23
10位	豊田　剛					9	13		22
11位	坂田勇	20							20
11位	光岡健一					20			20
11位	唐沢栄三郎							20	20
14位	小木曽晃						10	10	20
15位	栗林照高					2		17	19

■SHOP2stクラス通算ランキング

順位	ショップ	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	TOTAL
1位	モトスペース	17	17	7	6	11			58
2位	ガレージハイブリット			9	17	3	11	9	49
3位	ウイリー松浦	20	11	15					46
4位	KUMAMIZU	6	13	20					39
5位	クルーズ		4				17	17	38
6位	渋谷モーター商会		20					15	35
7位	名古屋南カワサキ販売				3	17		5	25
8位	バイク　クラブ　ハウス				15	9			24
9位	ダートバイク			13	10				23
10位	OJA'S　FACTORY				20				20
10位	ウエストポイント					20			20
10位	モトボックスむらまつ						20		20
10位	IRC神風130							20	20
14位	北多摩レーシング	13		6					19
15位	アムステーション			17					17

■SHOP4stクラス通算ランキング

順位	ショップ	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	TOTAL
1位	ガレージハイブリット		20	20	20		3		63
2位	アムステーション	13	17	11	15				56
3位	バイクショップMOTARO				6	17	15	13	51
4位	バイクショップ　キララ			15		10	13		38
5位	LYNX		15	13					28
6位	ステップ1	20							20
6位	TOKAI AUTO豊田店					20			20
6位	KEY'S						20		20
6位	モトサウンド							20	20
10位	ケイレーシングクラブ						10	10	20
11位	よしともくんち				8			11	19
12位	ライダースショップ　イシイ	17							17
12位	OHZEKI RIDE'S				17				17
12位	ダートバイク						17		17
12位	ヒトミオートサロン							17	17

※ポイント通算ランキングは1位20P、2位17P、3位15P、4位13P、5位11P、6位10P、7位9P、8位8P、9位7P、10位6P、11位5P、12位4P、13位3P、14位2P、15位1Pとし、BO主催&EDレース形式となった第4回大会以降で集計。95年はライダー日本一決定戦もポイントの対象としたが、2スト・4ストを問わず総合順位で計算した。またSHOPランキングは、同じ大会で2件以上のポイント対象となった場合、上位の1件のみをポイント対象とした。

10年の歴史から生まれた伝説の数々。新たなEDの歴史が、ここから始まる

――日本一王座決定戦10年史

日本最高峰クラスの真剣勝負は、確実に見る者を感動させる。そんな名場面やマシン、BO誌面をキュッと10年分、写真で紹介しよう。

世界最高峰のゲストライダーが参戦

4時間を走り終えて、誰がトップにいるか!?

▶第8回大会は激戦の末にウエストポイントのCRMが総合優勝!!

▶一時はトップに立ちながらパンク。総合2位に終わった第10回大会の石井正美選手

▶石井正美選手が駆って第2回大会を制したラフ&ロードXR

◀第10回大会でアトラクション中の成田匠選手。世界トップクラスの妙技に観客は大歓声!

アトラクションにもドッキリ!!

▶第9回大会は96年10月号掲載。この大会からレーサーOKのフルオープンとなった

◀第4回大会で総合1位獲得のSHOPウイリー松浦CRM250R。ライダーは北原選手

▲第2回大会、2ストクラスで優勝したウィリー松浦のKDX200。ライダーはもちろん松浦選手

▶第10回大会は97年10月号掲載。過去最高の参加台数を記録

▼王座決定戦はギャラリーだって重要な参加者。応援があってこそ……!

▼第4回大会で4ストI位に入ったステップIのXLR-BAJA

▲第4回大会で優勝した国際B級ライダー、北原輝紀選手のライディング

▶第9回大会で総合優勝をゲットしたモトショップむらまつのRMXと田中昇選手

▼第8・9回大会ゲストのランディ・ホーキンス。もちろん両大会とも余裕の最先着!!

第7回大会〜第10回大会

全日本クラスのED大会へと成長

前回までのバレ那須から、本州きっての山岳コースとして有名な愛知県・池の平ワンダーランドへ舞台を移した第7回大会。関東・関西どちらからも比較的アクセスしやすいため、戸田亘、田中兄弟、比留間智久らの関東トップランカーvs谷川龍太郎、安部雅明ら関西の国際A級ライダーということこれまでの構図にからむカタチで、モトスのチャンプ小倉良元、SSERのチャンプ尾崎哲生、しどきのチャンプ内田由和らのエリート勢、さらに渡辺親弘、請川意次らの現役A級が大挙エントリー。まさに全日本級のイベントへとステイタスアップした。

スタート直後からスプリント並みの超ハイペースで飛び出したのは、「エンデューロは今回が初めて」という渡辺親弘選手。オジャズファクトリーRMXを操り、バイククラブハウスRMXの小倉良元選手と共に1時間ではやくも7位以下をラップ。唯一、尾崎哲生選手が追ったが、それも及ばず。結局、渡辺選手のペースは衰えず、そのまま4時間を走破。小倉選手はガス欠にともなう一周のペナルティで5位。2位にはガレージハイブリットのKDX220SRを駆る田中昇、3位に総合3連覇の夢破れた戸田亘選手。戸田選手は18ℓタンクで4時間ノンストップ走行を狙い、一時はトップに1分差まで詰め寄ったが、後半のFブレーキトラブルでクラス3連覇に留まった。

95年の第8回大会はオジャズファクトリーRMXの渡辺親弘選手を軸に、初出場のウエストポイントCRMを駆る福本敏夫選手、同じく初出場のトーカーオート豊田店XRの光岡健一選手、さらにYSP藤沢TTの石井正美選手、モトサウンドRMXの村上智弘の5台が、終盤まで一周という僅差で競り合う混戦。レースの最後で総合優勝を勝ち取ったのは、福本&ウエストポイントCRMだ。また、試験的に同時開催されたライダー日本一決定戦では、渡辺選手がRMXでショップ対抗戦の雪辱を果たして優勝を飾った。しかし、ゲスト参加のR・ホーキンスは、渡辺選手を含めて全ライダーをノーマルのDRでラップ。世界トップクラスとの差をまざまざと見せつけられた一戦でもあった。

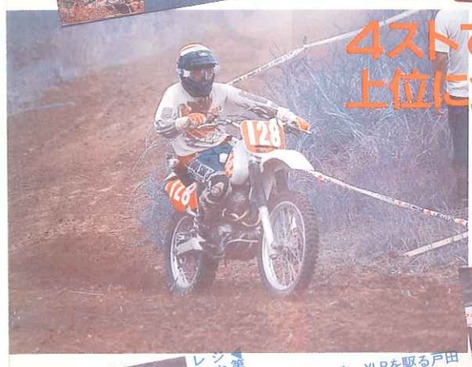
第9回大会からはコースを山梨県の富士ケ嶺オフロードコースへ移すと共に、レギュレーションも、それまで市販車ベースに限られていたマシンが、モトクロッサー、EDレーサーOKのフルオープンとなる。また、よりハイレベルな闘いを期すために、前回のライダー対抗はショップ対抗に吸収。2ST49台、4ST27台、レディス15台と増加の一途をたどるエントリーの中、優勝はモトボックスむらまつRMX250を駆る若手のホープ、田中昇選手がゲット。4STも成長著しい片山昇選手が制覇。EDレース界の世代交代を予感させる結果となった。

しかし、熟年ライダーも負けてはいなかった。翌10回大会では、総合優勝に伊田井佐夫選手(IRC神風I30/CR250)、同2位に石井正美選手(クルーズ/DT230LANZA)、4ST位に唐沢栄三郎選手(モトサウンド/XR400)がそれぞれ入る。期待の若手ライダーは降り出した雨にペースが上がらず、1ラップ遅れで渋谷清幸選手(渋谷モーター商会)の3位がやっと。若手ライダーが今一つの壁にぶるかって伸び悩んでいる現状をも浮き彫りにした。

若手vsベテラン、東vs西、今年の第11回大会はどんな構図が見えてくるのか。いずれにしろ、そこからED界の新たなページが見えてくるに違いない。

若手vsベテランの闘いも見物

4ストでどこまで上位に食い込めるか



◀416ccへ排気量UpしたXR400Rで第10回大会4ストI位の唐沢栄三郎選手

▶第6回大会で2ストI位・総合2位、熊谷光博選手の走り

▲第8回大会でED日本一ライダーとなった渡辺親弘選手と、レディス部門日本一の水上聡子選手

◀第4回大会は91年8月号掲載。参加台数は2スト・4スト合わせてまだ23台の時代

▼第6回大会、XLRを駆る戸田選手。これが総合V2の走り!

◀第7回大会総合優勝のオジャズファクトリーRMX。レーサーからの流用多数

◀第5回大会は92年9月号掲載。4ストが総合優勝を果たしたのはこの大会と第6回だけ

▼第6回大会総合I位のXLR250R。2ストに対抗するため270cc〜排気量Up

◀第6回大会2ストー位のCRM250R。乗りやすさを重視

▶18ℓタンクで4Hノンストップ走法を目指した戸田選手のXLR。第7回大会

チームー丸になってこその栄光

▲第8回大会を制したウエストポイントのチームスタッフ